

令和8年度第1回大阪府スポーツ推進計画部会における意見整理表

資料1

議論	委員からのご意見	骨子案及び答申案たたき台への反映
議論① (全体構成)	・府民の日常に根差した形でスポーツが取り入れられるべき。 ・大阪にはスポーツに接する機会がいつでもあり、それが魅力のひとつ、これらをいかした大阪ならではの計画とすることが望ましい。	・大阪府の強みを活用した取組 ・子育て・働き盛り期の職等を活用した取組 ・連携体制の強化 ・スポーツツーリズムについて、人を呼び込むだけでなく、地域の価値を高める共創の視点
	・計画実現のためには、連携体制の強化が最も重要。 ・女性の骨粗しょう症の問題を踏まえ、女性には若い世代からスポーツに参画してほしい。 ・女性の実施率を高め、子育て期や働き盛り期の男女差をなくすことは非常に大切なこと。 ・若い時からのスポーツ実施が高齢になった時の健康づくりに重要であるため、医療関連部署との連携が重要。 ・スポーツをより身近なものとできるよう、施設利用のシステム担当部署との連携など進めていけると良い。	
	・計画実現のためには、連携体制の強化は重要。 ・「パラスポーツ」の推進とするのか、「インクルーシブスポーツ」とするのか検討してほしい。 ・スポーツとパラスポーツを管轄する課が違うことで連携体制強化が進まないのではないか。	
	・現状、スポーツツーリズムは誘客と地域活性化の視点が中心になっているが、地域に負担がかからない方策を考えるなど、地域住民の視点も重要。地域住民がどのように受け止め、地域の資源や価値をどのように支えていくのかという視点を計画に明記することで、持続可能なスポーツツーリズムの推進につながるのではないか。	
	・委員や関係団体の意見に共通するキーワードは、「持続可能性」「子どもの頃からの積み重ね」「人とのつながり」「障がい者と健常者がともにスポーツをする」など。 ・連携体制の強化は、とても大事で今後の課題。本論を作成する中で課題を克服するような内容にしていだけたら。	
議論② (目標値等)	・居場所という表現が一部理解しにくい。帰属感のような場所だけではなく、スポーツを介して感じられる人とのつながりや様々な人が共にスポーツに取り組めることがスポーツの大きな価値の一つ、それを指標とするには、「様々な人とのつながり」の方が近い。	「する」「みる」「ささえる」について ・指標：スポーツに参画(する・みる・ささえる)した府民の割合 ・目標値：100%
	・「する」「みる」「ささえる」の参画率は、100%をめざすべきであり、その目標達成に向けて努力することが重要。	
	・居場所は、継続的にそこに出入りするイメージがあるが、そこに1日おり、安心感を得た等も含めるとよい。	
	・同じ場所を共有することで、つながりから安心感を実感できウェルビーイングにつながるような内容を指標に入れてはどうか。	
	・目標値について、「する」「みる」「ささえる」の参画率を100%とすることに賛成。 ・スポーツ観戦率について、「テレビで見た」「直接見た」等も含めるとともに、「スポーツイベントに参加した」などの関わり方も入って良いのではないか。	
議論③ (骨子案たたき台)	・「スポーツをきっかけに居場所ができた府民の割合」を「スポーツを通じて新たな人間関係ができた割合」とする方がわかりやすく数値化しやすいのでは。	「つながる」「あつまる」について ・参考指標：スポーツを通じた「あつまる」「つながり」で「充実感」「幸福感」を感じた割合 ・参考指標の調査アンケート項目において、意見内容を反映して調査を実施
	・スポーツ実施率、スポーツ参画率の減少は深刻。 ・居場所ではなく、「スポーツを通じて新たな人間関係ができた」の方がしっくりくるのではないか。 ・目標値について、「する」「みる」「ささえる」の参画率を100%とすることに賛成。	
	・大阪府独自の視点から「あつまる」「つながる」を参考指標に設定するのはとても良い。 ・スポーツ庁の令和7年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」において、スポーツと人とのつながりを意識した項目が設定されているが、この項目はスポーツを行うための動機を把握するものであり、実際につながりが生まれたかについて、国は把握していないことが推察される。 ・大阪府独自の調査を行うのであれば、「スポーツを通じて新たな人とのつながりができた」は非常によい。 ・例えばソーシャルキャピタルなどの項目では、「スポーツを通じて友人とは親しくしている」や、「スポーツでつながる友人とは親しくしている」といった項目もある。こうした項目をスポーツイベント等の実施時に測定したり、府民調査で測定することはとても良い。	
	・「スポーツをきっかけに居場所ができた府民の割合」について、居場所には物理的な居場所と精神的、心理的な居場所の意味がある。この居場所は、人によってイメージは異なる。スポーツを楽しむことによる充実感、満足感の意味での居場所が大事であり、居場所という表現は残っても良いのではないか。ただし、居場所に加え、人とのつながりが生活範囲を広げる等、達成感につながることから、「つながる」というキーワードも参考指標に入れるとより分かりやすいのではないか。	
	・生涯スポーツとレクリエーションalスポーツは、同じ土俵にあるものではない。生涯スポーツは、継続的にスポーツに関わっていくという意味、まさに計画の骨子になるもの。レクリエーションalスポーツは、スポーツをする目的で競技スポーツと対比的なところに置かれ、どういう目的とするかの捉え方のひとつであり、広くスポーツをする中の選択肢のひとつ。 ・その人が何を目的にスポーツをするかは様々であり、選択肢が多いことは非常に良いことであり、レクリエーションalスポーツも含め、その人がやりたいことが機会として設けられていることが重要。	
議論③ (骨子案たたき台)	・基本理念には「楽しい都市へ」とあり、現行計画の「楽創都市」から引き継がれている部分もあるので、楽しいスポーツとは何だったかと、現行計画の評価も入れていく必要がある。	・意見をもとに、スポーツに係る言葉の定義を整理 ・現行計画の課題整理により評価 ・多様な主体が「つながり」の中で事業を共創し、シビックプライド醸成によりウェルビーイングへつなげる ・連携体制の強化【再掲】 ・情報発信の工夫 ・財政の確保 ・「大阪・関西万博」のレガシーの継承及び「ワールドマスターズゲームズ2027関西」等の大規模スポーツイベントの開催 ・スポーツツーリズムについて、人を呼び込むだけでなく、地域の価値を高める共創の視点【再掲】 ・子ども期からスポーツの楽しさを体験することの重要性やその体験が途切れないような工夫 ・「めざすべきスポーツ像の実現に向けて」を設定し、各施策の柱に取り組むことで「めざすべきスポーツ像」の実現につながるよう修正 ・部活動改革については、「部活動改革及び地域クラブ活動の推進等に関する総合的なガイドライン(文部科学省)」に基づき、地域の実情を踏まえながら進める ・重点項目について、一部言葉を修正
	・同時に、スポーツコミッションからスポーツツーリズムにつながり、ウェルビーイングにつながることも意識する必要がある。 ・横の連携も課題。	
	・「4 スポーツに係る言葉の定義」の「生涯スポーツ」「レクリエーションalスポーツ」に少し違和感がある。 ・「第5章 スポーツ施策の推進体制等の強化」が重要と感じており、良い取組みが情報発信されず、府民が知らない状態になるのは残念。連携の強化と財政、この3つはとても重要。 ・万博レガシーをどのようにWMGにつなげていくかは大事であり、いかに連携させて万博レガシーをどのように伝えていくか、情報発信はすごく大事。	
	・第3章、第4章では各重点項目でめざすべき方向性がかなり明確になった。以前の資料だと因果関係が明確でなかったが、各項目が因果関係に沿って整理されている点は良い。 ・第4章を第3章と比較すると、大阪マラソンやWMGといった事業ベースの整理が中心になっているとの印象。スポーツツーリズムやスポーツイベントについては、交流人口の拡大や経済効果が重要になるが、加えて、地域の社会的価値も重要。 ・大阪府市都市魅力戦略推進会議において、観光を推進するうえで市民のシビックプライドの醸成について盛んに議論されている。大阪・関西万博がまさにイベントを通じてシビックプライドが醸成された代表的な事例であり、多様なステークホルダーや府民、市民が共創しながら作り上げている点が大きな特徴。連携体制の強化が重要という話もあったが、そこに市民と一緒に作り上げる共創性が非常に大事と感じる。 ・人を呼び込むだけでなく、地域の価値を高めるという観点から、共創の視点についても、第4章第2の柱であるスポーツツーリズムやスポーツイベントの推進に盛り込むと良い。	
	・子供の頃から運動することは、生涯スポーツに向けた取組みのスタートとして非常に大事。しかし、どうしても途切れてしまう場合がある。子どもの頃からスポーツを楽しみ、途切れないようにといった内容をライフステージに応じた機会の提供などに入れて欲しい。 ・例えば、中学校の部活動の地域展開が進められているが、中学校や高校では、クラブの指導者がおらず、なくなっていっている現状がある。そこで大学生を活用するなど、子どものスポーツ活動が途切れることなく、生涯スポーツにつなげていけるような表現が計画にあると良い。 ・加えて、「人とのつながり」、「スポーツのつながり」もキーワード、計画本文策定の際には考えてもらいたい。	
その他	・めざすべきスポーツ像について、「持続可能なスポーツ都市」のイメージが共有できているかが見えずらく、「全ての人がウェルビーイングを感じられるまちへ」についても、第3章、第4章が実現すると、どうウェルビーイングが実現するのかも見えずらい。 ・例えば、「ライフステージに応じた機会の提供」では、子どもの頃にスポーツをすることで生涯のウェルビーイングにつなげられるというような、一つひとつがウェルビーイングにつながっていくというような見せ方があるといい。 ・キャリアや人間関係、経済的な部分や身体的な部分、コミュニティという5つの要素がウェルビーイングを測定する指標と言われている。スポーツでは人間関係や身体的な部分、コミュニティの要素で関係が深いとなれば、ウェルビーイングが何を指すのかを冒頭でしっかり定義したうえで、この一つひとつをそこに近づけていくような見せ方やストーリーとなれば良い。 ・第4次計画では、万博レガシーからワールドマスターズゲームズ2027関西(以下、WMG)につなげること、つまり、万博レガシーで何が残って、これをWMGにつなげていけるか、1章設けるくらいの勢い。また、今大阪にある資源とこのビッグチャンスをつなげるストーリーがあると良い。 ・それ以外は、今までから継続していることなので、それがどうウェルビーイングにつながるかを示していくことが必要。キーワードは、WMG、万博レガシー、ウェルビーイング。	・生涯スポーツの振興(Ⅰの柱)、スポーツツーリズムの推進(Ⅱの柱)へWMGについて記載 ・子ども期からスポーツの楽しさを体験することの重要性やその体験が途切れないような工夫【再掲】 ・連携体制の強化【再掲】
	・第3章の文言について、何々による何々と書くと焦点が2つになり、どちらがメインかわかりづらい。 ・第3章に「4 スポーツコミッションによる生涯スポーツの推進」、第4章に「2 スポーツコミッションによる活力のあるまちづくりの推進」と、スポーツコミッションによりふたつのことを実現しようとしているが、わかりづらい。生涯スポーツの推進のための手段としてスポーツコミッションがあれば、生涯スポーツの推進を打ち出さないと、何がしたいのかわかりづらい。 ・因果関係も大事だが、目標とその手段に分けた方が分かりやすいのでは。	
	・第3章において、重点項目「1 ライフステージに応じた機会の提供」「2 スポーツに親しむ機会の創出による心身の健康」にWMGが記載されている。スポーツに親しむ機会の創出による心身の健康、これはWMGが開催され、機運が醸成されることで、スポーツを親しむ機会が創出され、健康が実現する内容となっている。大事なことであるが、これをどこか1か所逆にして「ワールドマスターズの機会をいかして」としてみる、WMGが開催されるのはまたとない機会であるため、この機会を成功裏に導くため、子どもたちに生涯スポーツ教育をする機会になるとか、大人は、これらを見てより元気になっていく。視点を逆にすることで、新しい何かが見えてくるのではと感じたので。すべて逆にはならないが、第3章1の柱の重点項目5として追加するか、第4章も重点項目5を作成し、逆の視点を見せることで面白い計画ができるのでは。	
	・万博レガシーとWMGをタイトルに出して、子どもが関われるような、府内小学生の万博招待があったように、WMGにおいても小学生が役割を担って参加ができるような仕組みがあると良い。 ・連携体制の強化の項目について、具体的な取組みを記載することで計画がより実現可能性のあるものとして府民に広く知ってもらうことができるのでは。	
	・子どもが元気になるば保護者、大人も元気になり、やってみようという気持ちにつながるかもしれない。そんな視点も必要。 ・WMGを子どもたちに周知し、子どもたちが自分の市で来年、こんな大きな大会が行われることを勉強し保護者に話し、保護者が出てみようという気持ちになればなお良い。	
その他	・参考資料として第4期スポーツ基本計画の作成について中間報告素案があるが、重点課題3では地域スポーツ資源の活用が掲げられている。その中ではスポーツツーリズム等による地域活性化に関して、担い手となる組織基盤の強化や人材育成についてスポーツ庁で盛んに議論されている。骨子案たたき台では、そのような人材育成に関する記述があまり見られない印象。地域住民や民間企業とともにスポーツツーリズムを推進するうえで、府として人材育成に関する考え方や取組みについて、計画の中で触れても良いのではないかと、国の動向を踏まえて感じた。	・連携体制の強化【再掲】
	・財源の確保について、クラウドファンディングなど色々と方法を検討できるのでは。	・財政の確保【再掲】